

空中樓閣 漆

序章

「如何かな？モガミ氏（うじ）」

紅蜘蛛（べにぐも）型サムライは浮揚する高度を下げてモガミに近づき、グイと覗き込んだ。雷電である自身よりも大柄な紅蜘蛛に間合いに入られ、圧迫感を感じてモガミは一瞬たじろぐ。戦さ場でもないのに機械の体同士がこれ程接近することは滅多にない。

「しかし、ササラギ殿、機械ザムライによる支配とは……」

「必ず実現する。そして、我らがその頂点に立つのだ」

「あまりに気宇壮大で、にわかには信じかねるな」

「お主のためらいは良く分かる。かつて某も、持ちかけられたときはまず笑い飛ばしたものだ。しかも、お主には軍での立場もあることだしな」

「しかし、そこまで打ち明けられては、断ることは難しかろう」

「その通り。何より、お主が断るとは露ほども思っているおらぬがな」

紅蜘蛛は機械の体をわずかに揺すりながらふおつふおつとくぐ

もった笑い声を漏らし、身軽に体を捻ると、後退して距離を取った。

モガミは周囲を見回した。紅蜘蛛ササラギの率いる傭兵部隊が自前で持ち込んだ攻撃艇の中に、自分がまんまと誘い込まれたことは明らかだった。この部屋にいるのはササラギ配下の紅蜘蛛や雷電が五騎。別の部屋に更に教騎。同行の自分の部下は、船外に泊めた自艇で待たせてある。

先の戦闘が終了したとき、雷電隊所属の教騎が帰還しなかった。引き上げ命令には応答したが姿を見せなかったのだ。いずれも信頼の置ける部下であり練達のサムライであった。

その探索に、余力を残していたササラギ率いる傭兵部隊が加わった。空間に残されたわずかな手掛かりを辿ってこの高度、成層圏まで到達したとき、突如計画を明かされたのだった。今にして思えば、ここまで導くことになったあれらの痕跡は、実は意図的に残された物だったと分かる。

お主を優れたサムライと見込んで、と持ちかけられた計画の真偽をモガミは計りかねていた。

「ともかく先ずは、部隊を離れてこちらへ来ているという我が配下の者らに会わせて貰いたい」

「会うてどうする。あの者らは我らに賛同して軍を抜けたのだ。上官だったお主には合わず顔がないと思うておる。お主も加わると決まったらば、その時に改めて対面すれば良からう」

「彼らの意志を確かめたい」

「くどいぞ、モガミ」

敬称すら省いた紅蜘蛛の断固たる態度に、モガミはいよいよ自分  
が抜き差しならないところまで追い込まれたことを感じた。

強力な助っ人としてモガミの所属する東方（ひがしがた）高層  
部隊に派遣されてきた傭兵達。彼らは始めから「そのつもり」  
だったのだろうか。機械のサムライをこの計画に誘い込むのが  
目的だったのだろうか。

しかし、助っ人達の戦さ場での働きは実に見事であった。ま  
さに主家に代々仕えてきた郎党のそれであった。モガミにとつ  
ては、明かされた計画に対する驚きよりも、そのふたつの姿の  
落差を知った衝撃の方が大きかった。最早存在しないはずの臓  
腑に何か重い物が溜まり始めているような感触があった。

「さらに詳しい話を聞かせて貰えるのであろうな？」

「おお……」

取り巻く機械ザムライから押さえたどよめきが起こった。

「無論だ」

紅蜘蛛の口調も親しみを込めたものに変わった。

「しかし」とモガミは一同を制す。

「その前に、一旦部隊に戻らねばなるまい」

「何故だ」

「この度の探索行動は隊の追尾を受けておる。この座標まで来  
て戻らぬとなれば」

「部隊に残っておるサムライはあらかたが生身だ。あやつらに  
ここまで来れぬ」

「そう思うか？司令官はアカイだ。どういう人物かは、お主ら  
もこの半年その目で見て分かつておるはずだ」

そういう意味では侮れないのがまだいた、とモガミはひとりの  
サムライの顔を思い浮かべた。

シマダカンベエ。お主が身共（みども）のなそうとすること  
を知ったなら……。おっと、もうひとりおったな、シチ。この  
若いのには誰より知られてはならぬ。さても。紅蜘蛛共よりも  
このふたりの詮議をどう凌ぐかの方が難しそうだ。

生身であったら恐らく苦笑をこらえることが出来なかつたに  
違いない。そう思ったことでモガミは心を決めた。

紅蜘蛛は懐疑的態度をくずさない。

「お主が再びここへ戻って来るといふ保証はない。むしろ、全  
てを報告して部隊を率い、我らの前に立ちはだかる可能性の方  
が高い」

「当然の懸念だ。しかし、帰艦せねば結果は同じこと。戻らね  
ばならぬ事に変わりはない」

紅蜘蛛はしばし無言だったが、やがて重々しく口を開いた。

「では、ここへ戻ってくるのだな、お主単身で。我らの仲間に  
加わると信じて良いのだな？」

「うむ」

モガミはしかとうなずいた。

「お主が自身の言葉を違(たが)える人物ではないこと、我らは承知しておる。楽しみに待つておるぞ、モガミ」

## 第一章 追跡

探索に同行した部下を連れて、モガミは部隊の旗艦に戻った。艦の会議室にはいると、奇妙なことに懐かしさを覚えた。

地上部隊の格納庫をそのまま移したのだから、先程までいた機械ザムライ専用の部屋に比べれば手狭である。しかしここでこれまで、幾多の戦さを切り抜けるため、数々の作戦を練ってきたのだ。

雷電の目の高さで作られた張り出しに、それらの作戦を共に編み出した仲間が待つていた。部隊の司令官アカイヒラザと切り込み隊長のシマダカンベエ。そして、シチロージ。

「：そこから先は複数の可能性が見て取れた。彼らと検討して、二手に分かれようということになったのだ。それ故、追跡継続の許可を貰うため、身共がこうして戻って参った」

モガミの報告を聞いて、アカイは顔をしかめた。

「どうも今ひとつ腑に落ちんな。雷電にとつても成層圏はそれほど快適な場所ではあるまい。その先に何があるというのだ？」

「それを確かめに参るのだ」

アカイの隣に席を占めていたカンベエが言葉を挟んだ。

「紅蜘蛛達の艇の機器や装備で足りるのか？」

「それは問題ない。さすが、あの攻撃艇と共に戦さ場を渡り歩いていただけのことはある。下手な戦艦は叶わぬぞ」

「司令官としては即断は出来ぬな」

「身共は一刻も早く探索に戻りたい。所在不明になっておるのはいづれも有能なサムライばかりだ。状況は未だ不明だが、出来得るなら何事もなく連れ戻したい」

「それは俺も同様だ。では、お主が整備点検を済ますまでに結論を出すことにしよう」

「かたじけない」

「モガミの結論は既に決まっておるようだが？」

「それは分かっている。が、カンベエ、一応検討するのが司令官というもののだ」

上役あたりが顔を見合わせるのを、傍らでシチロージは黙って見ていた。雷電も生身であればそれに加わっていたかも知れないと思う。

彼らより一回りほど年若いシチロージは、話し合いの場では一応遠慮して、何か問われるまでは聴く側に回るようにしていた。しかし今、口をつぐんでいたのは別の理由からだった。

シチロージの耳には、雷電の言葉は何か別のことを語っているように聞こえるのだ。「確かめる」「連れ戻す」そして、侮れ

ない傭兵達の装備……モガミがまだ報告していないことがあるように思えた。

「それからこれは身共の一存だが」

会議室の隣にある整備場への扉が開くのを待つ間、モガミはまだ傍らにいたアカイに告げた。

「この探索には身共ひとりであると思う」

「単独行動は感心せぬな」

「目下、我が軍の雷電隊は手薄だ。少しでも多く残っておらねば、万一ここが交戦の事態になったとき……」

「それも含めて検討しておこう」

「相分かった」

重い扉が降りて再び整備場と会議室が隔てられると、司令官は同席のふたりに向き直った。

「カンベエ、今の話、どう思う」

「いつものモガミとはいささか違っていたな。雷電隊の長として部下の行方不明に責任を感じておることは確かだが」

「やはりお主もそう思うか」

「うむ。報告が司令官であるお主だけでなく我らにもというのも引つかかる」

「単独では遣りたくないが、さりとてこれ以上雷電が減るのは、モガミの言うとおり、いざというとき痛手だ。とはいえ生身あの高度で長く艦をはなれて行動することも叶わぬ」

「ここはモガミを信じて任せるしかあるまいと俺は思うが」

「部隊を預かる者としては、例え機械のサムライでも、配下の者を余計な危険に晒したくはない」

「お主の気持ちは良く分かる。が、我らは同じ修羅場をくぐってここまで共に生き延びてきた。これからもだ」

「そうだな。ここはモガミの思うとおりらせてやろう」

「決定だな。ところでシチロージ」

「……はい！カンベエ様」

いきなり話を振られて、シチロージは内心慌てた。ふたりの上官は推移を見守ることに決めたが、では自分は、と思いを巡らせていたからだ。胸の内を見透かされたかと冷や汗が出る。

「司令官の今の決定、しかと聞いたな」

「はい」

「勝手に何かをするなよ」

「……何も致しません！」

抑えようとしても頬が紅潮していく。若者の正直さにアカイもカンベエも苦笑した。

「良い返事だ」

自分はいつもこんな扱いだ、とシチロージはムツとした。しかし、モガミの報告とシチロージのふくれっ面についてはひとまず終わり、話は、雷電隊長の不在を埋めるための新たな布陣の検討に移った。